

神様と僕とデスゲーム

スタンチツカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無機質な部屋で目覚めた少年は神様とのデスゲームに身を投じていく。

少年は何を得て何を失うのか、信じられるのは自分一人のみ。過酷なデスゲームは徐々に加速していき…？

これは神様と僕との最初で最後のデスゲーム。

目次

僕と友達の出会	1
僕の名前と部屋と自己紹介と。	3
無表情と中華風と正義の味方と	5
親友と妹と僕	8
平凡と美しさと騎士と厨二病	11
ギャングとゲーム説明	15

僕と友達の出会い

瞳を開け、身体を起こすとそこには真っ白で無機質な部屋が広がっていた。

僕が今、寝ていたベット。手を伸ばせば届きそうな距離にある机と椅子。そして窓。扉は無い…少し行った所には鏡。

そして僕に違和感が走った。いつもは頭に入っていたはずの”記憶”が無い。僕が誰だか分からない。此処は何処なんだ。

一体何があったんだ。考え出したらきりが無い。鏡へと向かうと歩き出す、身体が言う事を聞かない。

狭い部屋だから直ぐに着くはずなのに、ふらふらするせいで中々つかなかった。やつと着いた鏡を覗いてみるとそこには、

銀髪のロングヘアで左目が黄色で右目が紫色のオッドアイの少年がいた。

「……これ、が…僕…なの…?」

叫んでいたかのように、喉が痛くて声が掠れている。

ぺちぺちと頬を叩いてみると中々すべすべな感触だった。

すると、”コンコン”と控え目なノック音響いた。

ノック音が聞こえる方に移動して、そこに体当たりをかます。そこから見えたのは明るい光景とルビー色のショートカットで緑色の瞳をした少年だった。

此処から僕の歯車は狂い始めていたのだろう。

「あの…僕は、”田村 陽介”。あの、大丈夫だった!」

あたふたと僕の心配をする彼…改め、陽介は何気にモテるぐらいの美形だった。

「……大丈夫…だけど…」

「え!?大丈夫声?あー…あ!この飴を舐めてよ!ポケットに入ってたんだ。」

「……ありがとう」

手渡された飴を口に放り込む。ん……これはイチゴ味だな。甘くて美味しい。

「あのさ…君の名前は？」

「…覚えて…いない。分からない…んだ…」

声が少しずつ出せる様になってきた。飴って凄いなだな。

「分からない…？えー…じゃあ何て呼ぼうかな…」

「別にいいよ…名前なんか」

「あ！君は男なのに髪の毛が綺麗だし、銀髪だ。だから仮に”銀”って呼んでもいいかい？」

「別に構わないよ。ありがとう…」

銀。銀か。いい響きだ。嫌いじゃない。むしろいい感じだ。

「僕は、此処に囚われた人を解放していたんだ。君は16人目。最後の1人だ」

「此処に囚われた人を解放？どう言う意味だよ…」

声が出る様になった。それにしても解放？なんだそれ

「此処には自称”神様”がいる。神様に、僕は君らを起こしてこいつと言われたんだ」

「……は？」

神様なんてバカげてる。僕は神様なんて居ないと思っている。昔でもこれからも。

「無理もないよ。見てみれば分かる。僕と一緒にいこう。」

「……ああ」

此処に居ても何も始まらない。僕は行動してみることにした。

僕の名前と部屋と自己紹介と。

「あの、陽介君？何処に向かっているの？」

「……えっと、GOD roomだよ。」

どうやら神様はネーミングセンスが皆無らしい。はつきり言つて GOD roomとか凄くダサイ。

「ふうん…ねえ、GOD roomでは何があるの？陽介君」

「神様が居て…きつと、君の名前も分かるはずだよ」

僕はてくてくと陽介君について行く。5分ぐらい歩くと…

「あれが、GOD roomだよ。」

やっぱりGOD roomはダサイんじゃないかな…そうGOD roomと聞きたびに思ってしまう僕だった。

「じゃあ、開けるよ。銀君。」

「あ、うん」

陽介は扉を開ける。開けた先に広がっていたのは、沢山のおもちやと男子や女子が14人ぐらい。

そして真ん中には美少年が満面の笑みで座っていた。

「やあーいらつしゃい。ボクは、”ミカエル”。神様だよ？」

美少年はミカエルと名乗った。そして自分は神様だと、だが僕はそんなもの信じない。神様なんて……

「……………僕は……」

「知ってるよ。君は確か…」天草 凧”だよね？」

”天草 凧”だと？それが僕の本当の名前なのか？いや…違う気がする…本能が違うと言っている。

「ささ、揃った事だし始めようよ。ゲームを！」

「ゲームだとお!?んなもん俺様がやるかよ！」

ミカエルがゲームを始めると言った瞬間に、黒スーツをビシツと着込んだお兄さんが怒鳴り散らした。

「なら、いいや。君はボクのおもちや達と遊んでてね」

ミカエルは相手にしていない。むしろこれが日常茶飯事だというぐらいに平然としている。

「その前に自己紹介しませんこと?」

着物姿の美人なお姉さんが自己紹介をするという案を持ち出した。

「ほら…ゲームと言つても何をするか分からないでございましょう?」

ここは全員の名前と顔を一致させておくべきですわ」

淡々話している美人なお姉さん。僕のタイプドストライクだ。顔が素敵だな。

「それもそうだね。ミカエルは待ってるよ。自己紹介済ませちゃつてよ」

一方ミカエルはつまらなそうだな。

「ならば言い出しっぺの私が言うべきですわよね…。」

さっきの美人なお姉さんが一番最初に自己紹介するみたいだ。

「私は、”甘野 光莉”（あまの ひかり）ですわ。趣味はゲームですわ」

艶やかな着物姿で髪は黒色のロングヘアの”光莉”さん。

「じゃあ次はボクだねー!?ボクは、”天野谷 ミカエル” 神様だよ?

よろしくね〜!」

いきなり神様が自己紹介してきたことに僕は笑ってしまった。

ああ。光莉さんの次に自己紹介するはずの子は泣きそうだ…

それを知つてか知らぬか分からないが、男性陣はミカエルを殴る蹴るの暴行に走っている。

”ふざけんなよ!?”などと罵詈雑言が聞こえるが無視していこう。

どうなつちやうんだらう。自己紹介するだけなのにこんなにも疲れだなんて…

無表情と中華風と正義の味方と

「次は、私ですね。」福田 夢衣”です。どうぞよろしくお願いします。好きな色は、緑です。趣味は…読書です。」

ミカエルへの暴行を放っておいて自己紹介が再開された。

”福田 夢衣”と名乗った少女は、無表情だった。瞳は死んだ魚のように光が無い。

服装は、エメラルドグリーンのパーカーにジーンズだ。

夢衣は、水色のポニーテールを揺らして続けた。

「凧さん…私のコトを覚えていますか？」

「君の…事？…いや。覚えて…ない」

夢衣は僕に自分の事を覚えているか聞いてきた。実は知り合いなのか？

僕が忘れてるだけで…

「そうですね。ならいいです。私の気にしすぎだったみたいで」

それで僕が”うん”つて言えば良かったんだろうけど、思わず僕は言葉を続けてしまった。

「待って…僕と君は…知り合いなのか？」

「……………」

彼女は答えない。それが余計に気になる。

「夢衣さん…答えてよ」

「……………言う、必要はありません」

夢衣は軽く涙ぐみながら言う。だがすぐにパーカーの袖で涙を拭く

「そっ…か…なら、いいや…」

「はい。ごめんなさい…△×△△さん…」

「えっ？」

何故だか僕の名前が聞き取れなかった。でも凧ではない事は確かだ。

不安は募る。だが自己紹介は終わらない。

「こほん…次は私アルね。」

次に自己紹介しようとして前に出てきたのは…中華風の少女だった。

スリツトの入ったチャイナ服。お団子状に縛られた赤色の髪の毛。それに口調が自分は、中華風だと言う事を語っている。

「私は、”白瑛”アル。武術を習っていたアル。好きな食べ物は小籠包と言いたいところアルけど…寿司アル。」

小籠包じゃないんだ…でも何気に自己紹介が面白かった。

光莉がクスクスと笑っていて、それが余りにも可愛くて見つめていたら、

僕の視線に気づいたのか、僕の顔をチラッと見てゆでダコの様頬を赤く染めていた。

その様子がさらに可愛い。

「みんなよろしくアル。気軽に話しかけて欲しいアルね。」

白瑛は明るい性格なんだな。こつちも何気に可愛い。光莉の次に。

ちなみに、ミカエルはまだ黒スーツに殴る蹴るの暴行を受けていた。

そろそろ止めに行くか…

十分後

ようやく、喧嘩が止まった。

僕の身体はボロボロだ。理由は単純。ミカエルをかばって僕が黒スーツに殴る蹴るの暴行を受けたからだ。

凄く痛い…でも我慢だ。我慢が大事だ。うん…我慢。

「次は俺だな！俺は、”藤田 正義！えつとー…スポーツが好きだぞー！」

正義と名乗った彼は、熱血漢タイプだった。

まあ、僕は熱血漢とは馬が合わない。考えてみてほしい。

何事にも冷静な僕。何事にも本気で取り組む正義。真反対じゃないか。

だから全然馬が合わない。

正義は、茶髪で無造作に切られた髪が特徴的だ。

瞳は黄色。綺麗な黄色だ。

「みんな、静かだな?!大丈夫か?!気合いあるか?!」

まあ、うるさい。やはり僕とは馬が合わない。

「うるさいです。正義さん。静かにして下さい」

夢衣が静かにする様に咎める。

「うるさいか!?何故だ!?!」

「何故じやありません。静かにして下さい」

「わははは!!」

本当にうるさい……

癖が強すぎるな。みんな……

親友と妹と僕

「ええと…次は…僕だよな?」

次に自己紹介しようと思前に出て来たのは、僕を救ってくれた、あの少年だった。

「僕は、” 田村 陽介”! 気軽に陽介って呼んでね? 後は…:…ボードゲームが得意かな。お互い助け合おう!」

見事な自己紹介だ。簡潔で、分かりやすい。きっとみんなに頼られるだろうな。彼は、

「あーえつと…風君。飴、あげるよ」

陽介は、僕の所に歩み寄り救ってくれた時と同じ様な飴を差し出した。きた。

「あ…ありがとう。陽介君」

「ううん! 良かったらなめてね。」

ニコツと陽介は笑った。爽やかで見ているこつちが幸せになる様な笑顔だ。

僕は、そんな事を考え、もらった飴を口に放り込んだ。

◇◇◇

次に出て来たのは、僕と同じ銀髪の少女だった。

「……………」 天草 “月世” …よろしく。」

天草……………? 僕と同じ名字なのか?

「おにい…探し回ったよ…もう、私から離れないで…」

そう言つて、月世は僕の側に歩み寄りぴとつと、細い身体を密着させてきた。

「え…つと、おにい?…つて僕の事かな。だとしたら僕は君を知らない」

「君じゃない…おにい、月世って呼んでよ……………」

月世はとても綺麗で、銀髪をツインテールにしている。

「あの…近いんだけど、月世」

「……………妹は、兄を守るもの。そう…おにいが言つてた…」

「僕が?」

「……………そう。」

月世は、僕の事をおにいと呼び、慕ってくる。

記憶が無くなる前の僕は、こんな可愛い子が慕ってくるほどいいやつだったのかな。

「おにい…神様のせいであの時は邪魔されたけど…諦めてないよね？」

「え、ああ、うん。」

話を聞いてなかったが、一応頷いた方がいいだろう。そう思い頷いた瞬間に

月世は花が咲く様な笑顔を見せた。

なんなんだ、こいつ……

◇◇◇

「えっと、次は僕ですよね」

そう言つて僕は月世を一旦離し、みんなの前に出て来た。

「僕は、”天草 凧” です。よろしくお願いします」

僕は、普通の自己紹介をして、元いた場所に戻ろうとした時に、夢衣が僕に言葉をかけた、

「…妹さんが居たんですか。凧さん」

「えっと…そ、そうみたいだね」

「私へのあれは嘘だったのですか？」

あれってなんだろう…なんかしたのかな

「あ、あれって？」

「私に…その…」

急に夢衣は口をもごもごさせ始めた。言いくいのだろうか。

「なんでも無いならもういいですわよね？」

光莉が夢衣の話を遮断させる、

「で、でも…」

「いいから、よろしくお願い致しますわね、陽介、月世さん、凧君」

「はい！よろしくお願いします。光莉さん」

「……よろしく」

「あ、よろしくお願いします」

僕の過去への謎は深まるばかりだ。

妹は出てくるわ、飴をくれる友達はいるわ、僕の過去を知ってるけど教えてくれないやつはいるわ。
どうなっちゃうんだろうな。これから

平凡と美しさと騎士と厨二病

「ええっと…次は、私だよねっ!？」

そう確認を取ったのは、栗色の髪の毛をボブにし、パジャマの様な服に身を包んだただあどけない少女だった。

「私は、”木下 アグリ”。気軽にアグリって呼んでねっ!えっと…成績とか身長とかは、平均で…クラスの人からは、”平凡のアグリ”って呼ばれてただけだね、それでー…」

アグリという子は、とてつもなく話が長くて僕らが全然知らない話も織り交せてきた為にただただ、暇だった。

「アグリさん。静かにしましょう。」

そんな僕達の暇な雰囲気を感じたのか、夢衣がSTOPをかけた。「え?あ、そうだね!うん。ごめんね!よろしくね〜!」

明るい子だが、あまり関わりたくはないタイプだな。でも、あんな風なムードメーカーは1人はきつと、必要だろう。あの子のお陰で楽しくなりそうだ。

◇◇◇

「次は、妾だな。」

一際目立つ真紅のドレスに身を包み、金髪を綺麗に三つ編みをした少女が前に出てきた。

今まで無駄話していた奴らが一斉に彼女を見た。とてつもないカリスマ性を持っている。

「妾は、”スノースイム”。名前負けせぬ様、頑張っておる。」

スノースイム…真紅のドレスを身にまとってそれはないだろう…

”雪”って…ドレスも白くしたらいいのに。

「妾はのう…名前こそ白いが、赤が好きなのじゃ。だからこのドレスの事も許して欲しいのじゃ。」

申し訳なさそうにスイムは俯く。

だが僕の角度からは、下を向いてるがほくそ笑んでるのが見えてい

る。「だ、大丈夫ですよ?が、頑張りましょう?」

と、優しい光莉。

「大丈夫です。ドレスぐらい許します」

と、無表情で淡々と言う夢衣

「……おにい……あの人……嘘泣き……上手……」

と、僕の袖をくいくいと引つ張って耳打ちしてくる月世

「はははは！これからよろしくな！」

大口を開けて笑う正義

「寿司食べたいアルね……」

呑気な白瑛

「あわわわ……大丈夫かなあ？」

と、遠目で見える陽介

「きちよ、あ、噛んじやった……きつと大丈夫ですよ！」

カミカミなアグリ。

「妾は……妾は、嬉しいぞー！ありがとうなのじゃ……」

ほくそ笑みながら、スノースイムは下がる。

彼女にはなんかしらの闇がある。そう思った僕だった。後、こいつ

ら……大丈夫なのかな……

◇◇◇

「ボクの番か……」

そう億劫そう自己紹介がさぞ暇そうに、オールバックの彼は言った。

「ボクの名前は、”ユイト”……苗字は忘れた。職業は、”騎士” やつてた」

ユイトと名乗った彼は、ほどよく引き締まった細い身体。顔は整っていて、”美少年” という表現が似合うだろう。

そして彼に似合う黒い執事服。執事服に似合うオールバック。これは……女の人がメロメロになりそうだ。

「守って欲しい、女の人が居たら言っ……ボクが剣になるよ」

そう口説き文句を残し、ユイトは瞳を閉じた。ってこいつ！睫毛長いな！

「ど、どうしましょう……」

「かつこいいアル…」

などと、光莉や白瑛が呟いている。

男から見ても、ユイトはかつこいいよ…凄くね…

◇◇◇

自己紹介もそろそろ中盤に差し掛かって来た頃、問題児は満を辞して口を開く。

「ふははは!!俺の名前は、”十文字 カケル!!”闇の秘密結社、ダークネスを率いる者!」

僕は、彼の容姿、言動を見た聞いた瞬間、こう思った。

”あ……こいつ、ヤベエやつだ…”

と、カケルと名乗った少年は、黒いローブを身につけ、目には紅いカラコンをつけていた。

通りで、元々オツドアイの僕を見るわけだ。

カケルの発言は厨二病というやつだろう…まあ、僕はそれを否定しようとは思わない。だが、こいつはヤバイ。なんというか、ヤバイ。

「さあ!俺の力の前にひれ伏し、忠実なる下僕とかせええええ!!」

……マジで、ヤバイな。こいつ…

「怖いのか!?なんと言ったかな…えつと…あ!陽介だったな!俺の下僕となれ!」

「え…お、お断りします…」

陽介が可哀想だ。君みたいな変人に絡まれて。

「なら…えつと…あー…月世!お前が下僕となれ!」

「……私の…心は…おにい…だけの…もの…」

月世は僕の服の袖を掴み、淡々と言った。服が伸びるから袖をあまり引つ張らないでほしいな…

「あーもう!だったら、後でスカウトしにくからな!待ってるよ!」

お断りします。全力で。

周りを見ると、正義以外引きつった顔をしている。正義だけは、ひたすら笑っている。大丈夫かな?

◇◇

自己紹介もそろそろ終盤だ…僕は出そうになった欠伸を殺し、頬を

パチパチと軽く叩く。
集中しないとな。

ギャングとゲーム説明

最後の自己紹介となった。

前に出て来たのは何かと神様：ミカエルに突つかかっていた男の人だった。

「俺様は、」神崎 斬だ。ざんでも、ざんさんでもいいぜ。」

斬と言った男の人は黒いスーツに身を包み、少し青みがかかった髪の毛を後ろでちょよこんと縛っている。

「まあ、気軽に話しかけてな！」

「ええ、分かりましたわ。よろしくお願い致しますわ」

自己紹介が全て終わった直後、ミカエルから声がかかった。

「もく。自己紹介長いよ。やつとゲームの説明が出来る！」

「ゲームの説明：？」

と、陽介が訝しげにミカエルに問う

「うん！ゲームをやらせる為に僕は君たちを集めたんだから：：やらないとね！」

「また、始まるんですか。あのゲームを：！！」

ミカエルを睨みつけ唇を噛む夢衣

それでも構わずミカエルは続ける

「生きて帰りたいきや、ゲームを始めよう？」

神様とは思えない悪魔みたいな顔をしてミカエルは笑い、話すのを続けた

「知ってる人も居るけど、一応のゲーム説明だ！」

そうやってミカエルはホワイトボードを何も無い虚空から取り出す。

「長いけど：：よく聞いてね♪」

そうやって1時間はゲームの説明を続けた

まあ、要約すると：

1。今から行ってもらうゲームは己の命を賭けたデスゲームだという事。

2。僕たちの他に違う神様に雇われた別チームがいるという事。

3。その別チームとサバイバルゲームをして勝った方が願いを叶えられるという事。

4。願いは何だつて叶うという事。

5。一人一人に能力が与えられ、その能力を駆使して、死にたくなきや生き残れ…という事。

6。異論反論は認めず、もしやりたくない者が居たら死んでもらうという事。

それを聞いた後、ほとんどの者が絶句していた。

自分の命を賭けたデスゲーム…

そんなものに僕たちはやらされるなんて…

拒否をしたらしたで死ぬ。

戦場に行き、運悪く死ぬ。

どっちを選んでもバットエンドだ。

「で、でも…もしかしたら死なずに帰ってこれるんだよね…?」

と陽介。

「そ、そうですね！運が良ければ生き残れる…」

と光莉さん。

「頑張つて生き残ろう!!みんな!」

と正義

「よ、よく分かりませんが頑張りましょう!」

とアグリ

「しゃーないアル。二回戦。やってやるアル」

と白瑛

「…おにい…と一緒にいる…」

と月世

「ああ、みんなで生きて帰ろう」

と僕が続く。

「なんだか…面白そうですね。みなさんの剣となりました」

目を瞑りながらユイト

「妾がいる限り、敗北という言葉はないぞ?」

とミカエルを嘲笑つてスノースイム。

「ダークネスとの直接対決だ!!」

とニカツと笑ってカケル

「俺様は…俺様は…やらねえぞ…」

「斬さん……?」